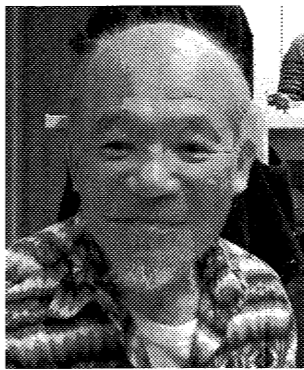


大阪編 8 (続) ユニークにして破天荒な教員群像

三浦 孝介

後年の組織参加だが 違和感なく定着

1941年生まれ。ご本人からは何も聞いたことがないが、たぶん生まれも育ちも大阪ではなかったか。大阪学芸大学(現・大阪教育大学)を卒業して教員



を受けたのだが、その人から「社革もいつまで持つかわからん(統社同志向か?)、それははっきりしてから声をかける」と言われたままで、やがてその人との縁も切れてしまった」とのこと。

80年代後半当時の時代状況、

丹羽 通晴

所属労組は東大阪教組だったと思う。

三浦さんの組織参加はやや遅く、40歳代もやや後半のことではなかったか。突然えらく年長の人

が現れてびっくりした記憶がある。ご本人によれば「若い頃に社革に所属している人」の影響を受けていたが、その人から「社革もいつまで持つかわからん(統社同志向か?)、それははっきりしてから声をかける」と言われたままで、やがてその人との縁も切れてしまった」とのこと。

よく言っていたことだが、「フロント派というのは面白い組織やな。みんな好き勝手にバラバラなことにやっていて、それもあちこちに領域を広げて活動をしているくせに、考えていることはどこか共通性もある。

その小さな違いの議論を聞いて

いるだけでも楽しい」。ということ、全国的な合宿などにも積極的に参加して、議論を吸収し、見聞を広げていった。

日本原との出会いと 残された時間

退職後の活動も幅広かった。

三浦さんというのは非常に多趣味な人で、いまでも『先駆』の裏表紙に掲載されている「不思議な世界」はその片鱗だ。自転車を駆使してあちこちへ出かけ、珍しい花木を撮影してはみなにメール配信する。その画像が重すぎてみなが往生したというのもいまでは懐かしい思い出である。

『先駆』へも、大阪各地の実情とその歴史の裏面を描きだした

りと八面六臂の活躍ぶりを見せた。そして、あるとき基地問題をとり上げることを思いついた。当初はネット情報だけで記事を作成しようとしたが、これだけではさすがに限界がある。しかも、実地調査をするとなると、経済的な壁が立ちほだかる。

そんなときに出会ったのが日本原だった。岡山県北部の山間の町、奈義町にある陸上自衛隊の日本原演習場。ちょうど夫人の出身地が岡山県高梁市、母親がまだ存命で自身の母親は大阪において、介護の必要性も感じて高梁市に別邸を構えた。その高梁と大阪のいわば中間地点近くに日本原があった。

夫人が岡山大学卒だったことも契機にして、日本原の基地反対闘争に尽力していた弁護士との激励会にも参加したりして、関係性を強めていく。そして、日本原演習場の中で牛を飼い、耕

作をしてきた内藤秀之さん一家と深く知り合うようになる。ちなみに、内藤さん一家の最近については、映画『日本原―牛と人と大地』(2022年、黒部俊介監督)で詳細に描かれている。私自身も三浦さんに誘われて、2度ほど日本原や内藤さん一家を訪れたことがあるが、まるで親戚のような付き合いをしていたことが思い出される。彼に誘われた人は数多く、その点では三浦さんは全くガードというかハードルのない人で、誰彼なく気軽に誘い、そのまま『先駆』記事を書かすという芸当もしのけた。確か、ホームページもわざわざ立ち上げたのではありませんか。しかし、残された時間は少なかつた。

70歳を少し超えた頃、娘たちから「もう運転は止めにしたら」と説得された。そして、その少し後に間質性肺炎であることがわかる。空気吸引機を付けざる

を得なくなり、「事務所に行くのは無理だ」と言われた。「それじゃあ、みなで自宅に行こうと思うが、どうですか?」と誘うと、「それなら歓迎するよ」と言われた。そのときはまだ元気で、「近くなら吸引機を付けて

池島 砧

最初からオッサン

だったな...

1936年、兵庫県飾磨郡安村(現・姫路市)に生まれる。54年、姫路高校を卒業して大阪学芸大学(現・大阪教育大学)に入学。このとき親や親戚一同



散歩している」と言い、「紙芝居をしている人が家に来てくれる」とまで言っていた。その意味では最後まで生きること、自分の関心事に貪欲な人だったという印象が強い。しかし、その年(18年)の9月に亡くなった。

から「アカになるなよ」と送り出されたが、学生時代にあっさり共産党に入党。この時代は学対部員として学生運動の指導部の一角を占めていたらしいことはご本人から聞いた記憶がある。砧という名は、外地にいた父親が朝鮮族の女性が布打ち作業を砧でしていたことから命名したらしいことも本人から聞いた。詩情のある親父さんだったのかも...

共産党から離れた事情は聞いたことがなかったが、「懇話会」の場で後輩の教員だった人が明かしてくれた。64年の春闘時、

公労協が4月17日に一斉半日ゼネストを実施する方針を確定。ところが、4月8日に共産党が

突如「ストライキ計画には修正主義者・トロツキスト・組合内分裂主義者による挑発のにおいがある」とスト中止を表明。これには党内からの反発も大きかったが、それまで「共産党に入れ」とオルグをしていた池島さんが一切言わなくなったらしい。

第8回大会から統社同への流れとは違うことになんとなく納得。あくまで現場、大衆運動の人だったことを実感した。そこからどう統社同・フロントの流れに合流したのかはよく知らないが、あの当時の教組には統社同の流れの人たちも数多かっただろうから、その時々で現場の状況も踏まえて判断していたのだろう。その後、60年代後半の運動の進展のなかで、池島さんは左派のスタンスを貫いた。

私が池島さんと最初に出会ったのは、70年代初頭。フロント大阪の府全体の会議だったと思う。こちらはまだ未成年で、池島さんは30歳代半ばくらいではなかったか。いまの歳となれば30歳代半ばは若造でしかないが、その当時から「堂々たるオッサン」の風格が漂っていた。

70年代の激動期、左傾化するフロント派の方針と現場との関係では池島さんも苦労されたと思う。後年、こんなことを語っていた。「フロントの党派方針と現場の運動感覚では、あえて言えば分けて考えていた。あれはあれ、これはこれ……みたいに」。そうでもしないと、頭が混乱したと思う。

退職後、池島さんは居住する団地で「ふれあい喫茶」みたいな活動もしていた。われわれもちやうど「社会を作る」「一から運動を立て直す」ことをひとつの目標にしていたから、池島さ

んの行動もそれに相応しい。そう思って「そのふれあい喫茶のことなどを『先駆』に書いてみてくださいませんか」と水を向けたが、池島さんの回答はにべもない。ここでも「それとこれは別」という考えが、池島さんには最後まで抜けなかったのではなからうか。

酒が好きで

集まることが好きで……

退職後もしばらくは講師として学校に勤務し、その後は大阪市の「いきいき教室」に勤務し続けた。「いきいき教室」では、自分のみならず全員の給与計算に近いことまでしていたように思う。2001年に昭子さんと再婚。このときは内々で10人程度の再婚パーティーもした。

池島さんといえは、切っても切り離せないのが酒。「偲ぶ会」でも「朝から一杯行か」という挨拶で10名程の職員が大衆居酒屋

屋・大丸に集合した」などという報告があった。昭子夫人の回顧でも、「今の住まいに移ってから団地の方々と仲良くなり、数人の方々と『ほちほち』という名のグループを作り、団地の集会所で喫茶店を開店しました。多くの方々に愛していただきました。このグループで月に1回話し合い、飲み会の場をつくり、また月1回はいろいろな所を歩き訪ねる（ほちぶら会）をしていました」とある。本当に酒が好きで、それ以上に人と集まること、みなで楽しく何かをすることに熱中した人生だった気がする。

後年は「暗くなると見えなくなる」からと会議には参加されなくなつた。最後に会つたのは、三浦さん宅にみなで押しかけたとき、さらに三浦さんが亡くなつて墓参（樹木葬）をしたときだった。21年9月12日死去。

大阪編 9

丹羽 通晴

沖浦 和光

諸分野で異彩を放った異色の研究者

周年行事にも参加されたりで、馴染みが深いように思う。ただし、安藤紀典さんが『先駆』で沖浦評伝を連載し、

沖浦さんは、安東仁兵衛さんの盟友であり、統社同でも一定の役割を果たされていた。ただし、本誌1月号の社会主義理論政策センターの項で「フロント派としても合宿に何度か来てもらったり、統社同の40周年・50



阪野さんの述懐

沖浦先生は、1968年に桃山学院大学に入学した時のゼミ

つに握手を絶やさず、人の目を見つめてそらさない迫力もあった。その点では、多くの人から「人たらし」などと言われもしていた。インドネシアへの旅なども何度か一緒した。市場などを率先して見て回り、民衆芸能や踊りなどにも強い興味を持っていらした。「インドネシアの寅さん」と呼ばれることも多かったように、生来の「おもしろがり」だった気がします。

丹羽の記憶

沖浦さんと最初に会ったのは、たぶん社会主義理論政策センターの総会か何か。とはいえ、理事と一会員ではとくに親しくする機会はなかった。フロントの理論合宿にも何度か来られたが、これも特筆するような記憶はない。ただし、フロント結成50周年では事前に安藤紀典さんが取材をされたのだが、そのお伴に私も自宅までお邪魔し

の担任だった(当時はそういう制度であつたらしい)。そして、「共産党宣言」を初めて読んだときのレクチャーもされた。そのときに「市場」を「いちば」と

詠み、笑われたことだけは半世紀以上たつたいまでも覚えてい

る。新左翼時代、繰り返される東京動員の度に「すみません。先生、また東京ですもん」と頭を下げると、黙ってポケットからくしゃくしゃの2000円を差し出していただいた。ただし、その頃は沖浦先生も統社同を離脱されていたし、その種の話をする機会はまったくなかった。

その後(21世紀になっていたか)、フロント派の政治合宿に来ていただいたときなどには、2人仲よく談笑していたのを覚

えている。少しは昔話に花が咲いていたのだろうか。

村上幸子さんの思い出

「沖浦会」という団体があつて、私もその一員のように扱われていたが、会則も会費もないような団体だったので、詳しいことはわからない。沖浦先生が

桃山学院大学を退職されて後に、南森町でときどき講演会があり、私も何度か足を運んだ。沖浦先生の話はあちこちに飛ぶことが多いが、その内容がとて

もおもしろく、人を引きつける不思議な魅力があつた。受講者(あるいは「沖浦会」も)は出版やメディア関係者、大学の「同和教育」関係者が多く、自他ともに認める沖浦ファンも多かった。そして、その参加者一人ず

うことで復党する。推薦人は安東さんだったが、結局は半年ほどで61年の分裂を迎え、組織を出ることになってしまう。

ところで、英米文学を専攻した沖浦さんが、後年に思想史や民俗学に傾倒していったのはなぜか。親しく交際したこともない私が解説することではないが、ご本人が語られた(書かれた思い)出話だったかも知れない(ことから憶測してみる。桃山学院大で教鞭をとつている頃、イギリス留学を果たし、その帰路にインドに立ち寄つた。そこでイギリスとはまったく違つた習俗や思潮、生活スタイルなどに接し、大きな衝撃を受けた。考えてみれば、沖浦さんが若かつた頃に傾倒したマルクス思想も、その底流には欧米で培われた思潮があつた。そのあたりからもう一度、自身の考え方も見直してみる必要があると感じたのかも知れない。

た。その後も、沖浦さんは共産党には復党しなかったが、共産党第7回大会、『現代の理論』発行禁止などを経て、いよいよ最終的な党内闘争になるから、とい

たことがある。その際、沖浦さんが「君らの組織で私が知っているのは君と朝日くんぐらいになったな」と言われたのが、妙に記憶に残っている。

ちなみに、小寺山さんから「沖浦さんが何の先生だったか知っているか」と聞かれたことがある。その当時は近代思想や民俗学についての著述を数多く出版されていたので、少し言いよどむと「英語の先生や」と言われた。たしかに沖浦さんは東大で英文学科を専攻していた。

共産党六全協前の組織や運動が解体していた頃、卒業間際に担当教官だった中野好夫さんに呼び出され、「これからどうするんだ」と聞かれた。「バイトでもしながら大学院に籍をおいて一から勉強して出直します」と小さくなって答えると「それなら工場地帯へ行つて教師でもやつたらどうか、君らは観念の

東京(首都圏) 編6

大井 武正

練馬の赤ひげ

「40青医連」(昭和40年卒の医局員で構成する青年医師連合)のメンバーとしてガリ切りやピラ配布などの裏方の活動を支え、東大病院新病棟移転阻止座り込み闘争で逮捕。出所後、すぐに戦線に復帰、医療社研活動を通じて精神医療闘争、東大病院精神科看護支援闘争、成増病院闘争などに関わり続けた。

「大井武正追悼集」にその全体像が詳述されている



青年医師連合を牽引

「二つ上の兄・大井玄さんの証言によると、「武正は中学時代、スターリンを尊敬していたと伝えられる」(追悼集)という。1951年に東京都文京区立第十中学への入学が「赤い道」への助走期間だったようだ。新聞部活動、全国学力テスト反対決議、原水禁運動などに触発され、十中卒業生有志による読書会活動を組織。「資本論」をはじめ、「家族、私有財産および国家の起源」、「矛盾論」などの輪読を通じて「主義者(ボルシェヴィキ)・大井武正」が形成されていく。その青年期の活動を方向づけたのは60年安保闘争と東大闘争であった。

日米安保反対運動が高揚して

いた1959年4月、東大教養学部理科2類に入学。当時、学生運動のメッカと呼ばれた駒場に身を置いたことが「赤い医者」への道を決定づけたとも言える。当時の学生運動の主流を形成していたのはフロント(共産主義者同盟)であったが、大井さんはフロントに対抗する全学連反主流派(構造改革派潮流)に属し、医学部から附属病院の第一内科に入学、東大闘争の中心舞台でインターン制度廃止、医局解体をスローガンに奮闘することになる。

当時、学生運動家の間ではインターン制度改善運動などは小ブル的改良闘争との批判的意見が強かったが、大井さんは「政治権力の移行により世の中の改革が一気に行われると考えるの

は幻想だ。人々がそれぞれの持ち場で社会的矛盾の解決に努めるべきであり、たとえ自分たちの地位の改善運動であっても、社会的意義を明確にしつつ取り組めば、必ず社会の改革につながる」との持論を説いて全国的な医学生組織化に注力していたという。

ある従業員60人、病床数1000床あまりの中堅病院で大井医師と看護学生が集まったのは1972年8月のことである。当時看護学校に通学する看護学生は夏休みや冬休みに1日12時間、月2日の休暇で働かされていたこともあり、その時は看護学生達の憂さ晴らしのための集まりだった。しかし、11月に24時間当直体制が導入され、2人の看護士さんが相次いで倒れたのを機に看護士さんの不満が爆発、大井さんらの呼びかけで12月に労働組合準備会が結成された。

(平田芳年)

成増病院闘争

「労組結成から争議解決まで先頭に立つ」

東京都板橋区のはずれ成増に



病院前総決起集会ではじめてのジグザグデモ(成増病院闘争の記録)より

企業労働者の労組である全統一労働組合の分会となった。労組結成を伝えれば金儲けしか考えない経営者(相沢一族)が、厳しい対応をとることは十分予測できたので、最初に公然化したのは大井さんだけ。以後、御用組合をでっち上げたり、中心メンバーを解雇したり、組合員の自宅に嫌がらせの電話をしたり、挙げ句の果てには看護師詰め所にクソをまき散らされたこともあった。

今でいう「ブラック企業」あるいは「ブラック病院」である。何度も組合員の追い出しを画したが実現できず、ついに73年11月に病院閉鎖を通告、反対する労組と対峙することになり争議となった。74年4月には機動隊を院内に突入させ、組合員を排除、支援の6人を逮捕、うち3人を起訴するという暴挙に出た。刑事弾圧である。病院閉鎖通告から2年、紆余曲折を経て75年11月に和解協定書を結び、争議は終結した。

翌年2月に中小

大井さんは東大医学部を卒業した後の青年医師連合の闘いで

名を馳せていた。しかし、「医療労働者の大部分を占め、かつほとんど未組織の状態におかれている民間中小医療労働者の決起と結合することなくして、それまでの医学部—大学病院闘争に刻印された限界を超える闘いを築いてゆくことはできない」との思いがあったと「成増病院闘争の記録」で書いている。

意気込みは大きかったが、初めて経験する労働組合では、ひとつひとつ手探りで進めざるを得なかった。医師は大井さん一人。あとは看護師、事務員などであった。他の医師は組合にシンプシーを感じても一緒に闘う人はいなかった。

労組員の中心は女性。多くは20歳代、争議支援者も20歳代であった。その中ですでに40歳に手が届く年齢の大井さんは、職種の違いだけでなく世代間の意識の違いもあった。加えて早期収拾を図りたい全統一幹部との

確執などもあり、苦労は大変だったと思う。

青医連時代に培ったのだと思うが、活字のようにきれいな謄写版印刷用のカッティング。これに対する評価は高かった。読みやすかったからだ。大井さん個人は、闘争の中で看護師で労組員の中村末子さんと結婚、最終時には家族が1人増えていた。(蜂谷隆)

地域に支えられた「すずしろ診療所」

大井武正医師の後半生の活動拠点、東京都練馬区にある「すずしろ診療所」である。都心の山手線の池袋駅(東京でも有数の利用客が多いターミナル駅)から、西武池袋線に乗りして各駅停車でも10分もかからない場所にある。駅のホームから白いビルの2階にある「すずしろ診療所」の看板が見える、ほ

んとに駅前の小さな診療所である。運営の主体は、すずしろ医療生活協同組合で、構成員はすずしろ診療所を設立した当初から診療所を支えていた、地域の人々がほとんどである。

今でも理事会を構成する人々には、診療所のある場所を紹介してくれた不動産屋さん、練馬での住民運動を大井先生とともに闘った方々、大井医師に本人または家族がお世話になった方、東京大学以来の同級生などである。東京都内の小さな医療生活協同組合、利用者の高齢化が今後の生協運営と、診療所の維持のための大きな課題になっている。

私と大井先生との出会いは、学園闘争が華やかな時代にさかのぼるが、なぜか記憶に残っていることはおいしいものをこちそうになったことぐらいしかない。本郷のすし屋と四谷のご自

行ってきた。

その一方で、生協職員、組合員、患者さんとその家族の皆さんと、ビルの屋上で月見の会を催すなど、診療活動以外の場でも地域の交流と活性化のために、その輪の中心なって活躍をしていた。休日などでも、診療所のフロアを使っての囲碁の会を開催し、親睦と地域での顔見知りの関係を構築することもあった。

医療生協としての活動

大井先生の思い出の中で、医療生活協同組合に関わる重要な取組について、改めて考える。同盟の会議の中で、大井さんが声を大にしてその実現に意欲を燃やした課題があった。「オルグが欲しい。オルグが必要だ」。診療所や介護事業所の医療・介護事業の拡大強化はもちろんであるが、診療所に足しげく通う地域の皆さんとともに、組合員の

宅で、いずれも2人だけで過ごしたことが記憶に残っている。物静かに語られる大井先生の言葉を聞きながら、医療や人生について話をしたことを思い出している。

すずしろ診療所時代については、介護保険制度が始まったころに訪問看護ステーション、居宅介護支援事業所、訪問介護事業所、鍼灸室等多彩な事業展開を行っていた時期にまたお会いして、かわりを持つこととなった。新年会に参加して(その当時は練馬区役所の区民向け集会室で、100名ほどの参加者が集まっていた)、その規模の大きさと多彩な人たちの活発な話を聞いて、驚いたことを記憶している。その当時は、診療所のビルの2つのフロアに事業所があり、医療や介護の専門職の人たちが診療所を中心にした医療生協の事業を支えていた。

がかなり多くいたこともあり、在任在勤の組合員による運営原則が厳しく問われるようになったこと、どう対応していくのか、私たち自身にも問われていたことであった。

しかし、大井さんの在宅医療を基盤にした地域の診療所としての大きな実績と、地域の区長選や諸団体との連携による狭山差別裁判やその他の課題の取り組みに、すずしろ医療生協が拠点としてどうしていくのか。大井さん自身がさまざまな事業を手掛け拡大していくほど、同盟からの支援も望んでいたのではない。その点を全同盟的な課題として、大井さんとともに議論、方針を考えることはなかったのが残念に思われる。

(小山政男)

大井先生は、診療所発足当初は医療機関が少なかったこの練馬の地で、地域医療の分野では大変先駆的な取り組みをされていた。かつてテレビでも放映されたことがあったが、在宅療養支援診療所として24時間、365日、患者さんの要望に応じて在宅訪問診療をする、数少ない診療所の医師であった。外来診療は大病院へ、地域の診療所では往診をする医師が減少する中、地域の住民の皆さんの命と健康を守るため、休みなしで在宅の患者さんを治療・療養する、赤ひげの医者であった。

この3年間のコロナウイルス感染拡大の状況が続く中、感染しても隔離病棟での治療を受けられない在宅の患者さんに、若い在宅医療を取り組む医師が救急車のごとくコロナの患者さんへの治療を行う姿が最近テレビで放映されてきたが、その先駆者として地域での医療活動を